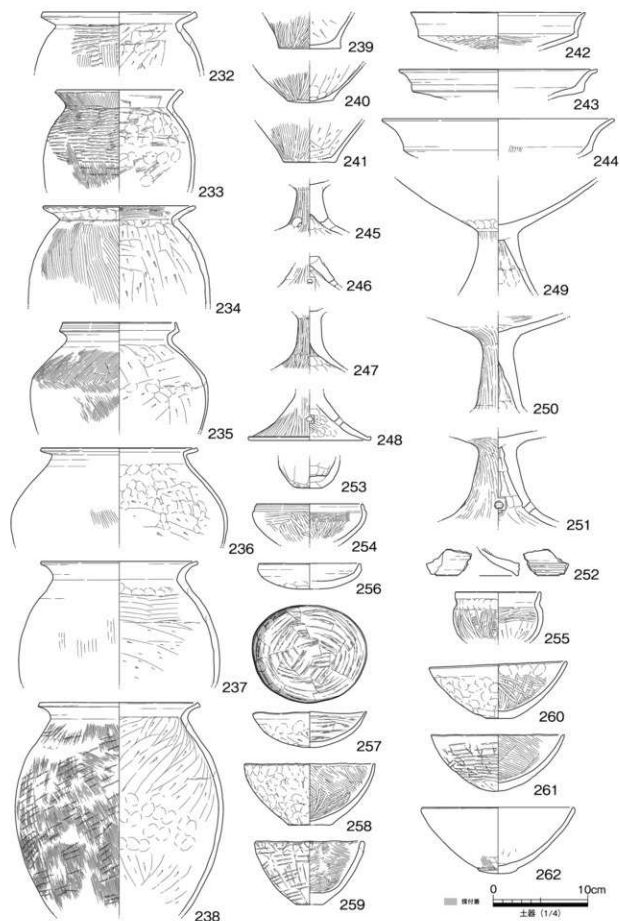
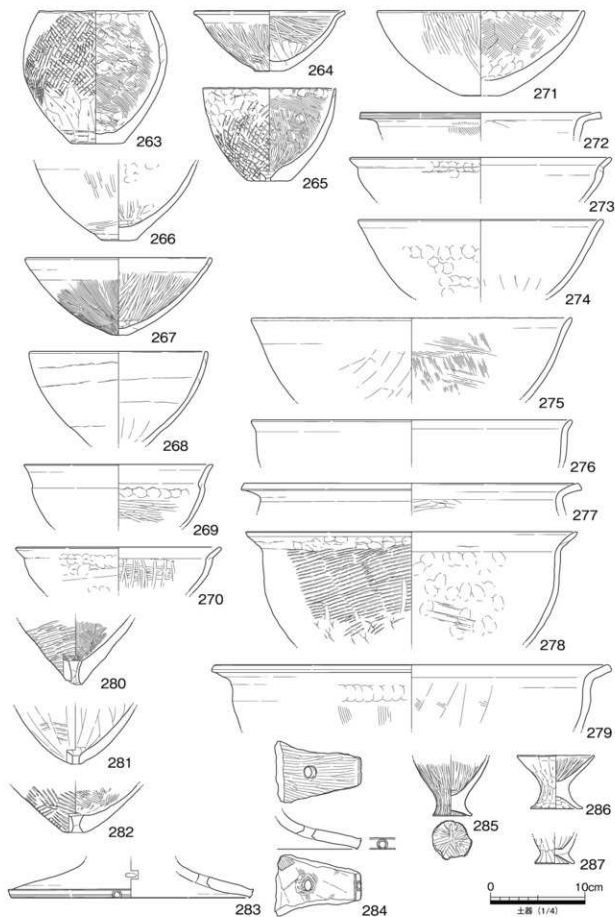


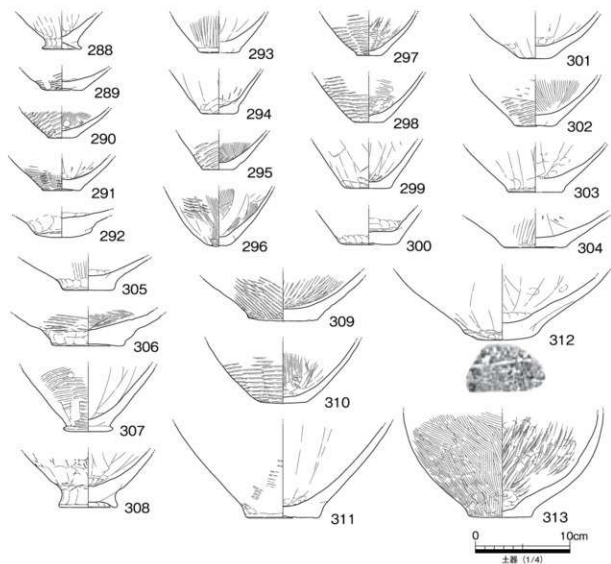
第 88 図 SD093 出土遺物実測図 1



第 89 図 SD093 出土遺物実測図 2



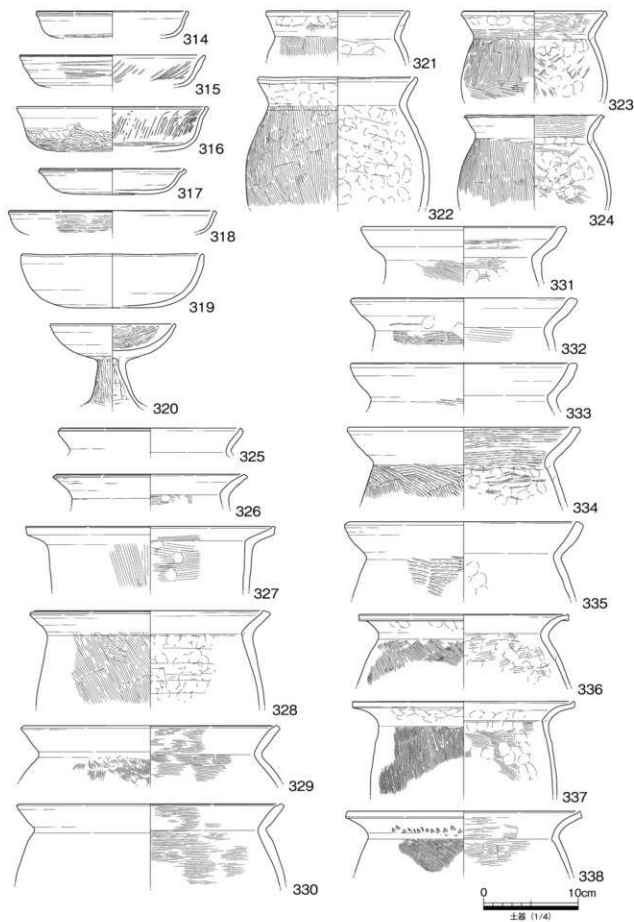
第90図 SD093出土遺物実測図3



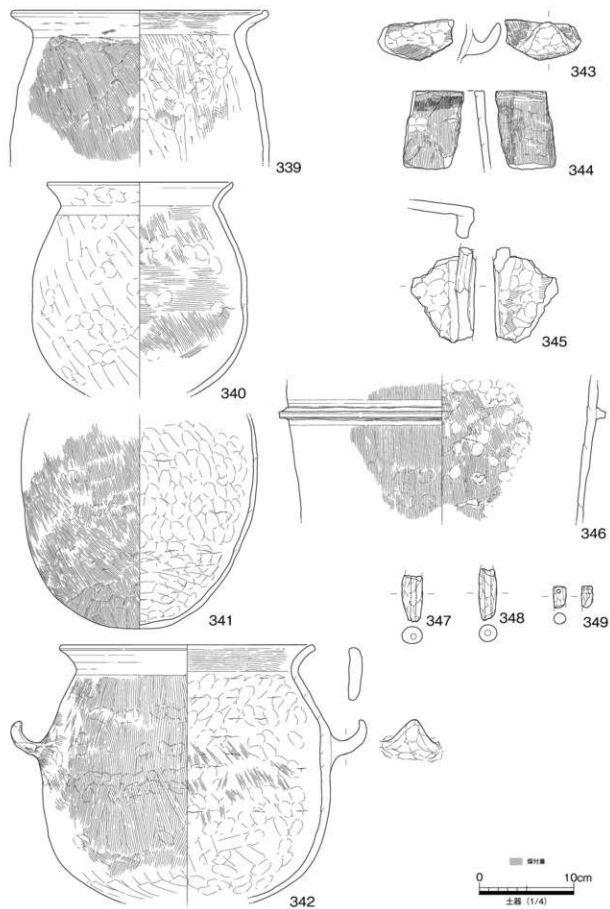
第91図 SD093出土遺物実測図4

314～346は土師器である。315・316は杯A、317・319は杯C、314・318は皿である。319はマメツのため調整等是不詳だが、飛鳥Ⅱ併行、続いて316が平城Ⅱ、315が平城Ⅲ、317が平城Ⅳ併行期にそれぞれ位置付けられる。320は高杯。杯部内面はミガキ調整が見られるが、マメツ等のため細部は不詳。脚部内面はシボリ目を消すようにケズリ調整を施す。編年の位置付けは難しいが、319に近接した時期を想定する。

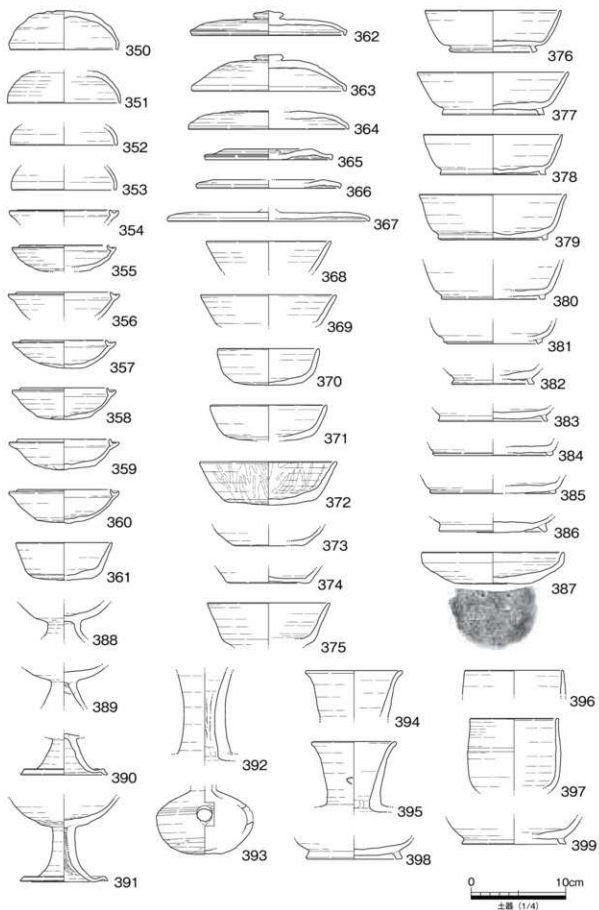
321～343は甕。321～326は小形の甕である。口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部を上方へ摘み上げる321～322・325と、外方へ引き出す324・326がある。323・324の体部内面には煤が付着する。327はバケツ状の体部から、口縁部は強く折り返して開き、端部を上方へ摘み上げる。331～335は内湾して開く口縁部を有する甕。布留甕の影響が残存する地域色の強い一群である。334は体部外面が二次的な被熱により変色する。336～339は強く外反して開く口縁部を有する長胴甕で、口縁端部を上下に小さく摘み出して拡張し、端面がヨコナデにより窪む336や、上方へ摘み上げる337～339がある。338の口縁部下端外面には、体部のハケ調整時に付いたとみられる工具痕が刺突文状に残されている。341は長胴甕の底部片。外面は二次的な被熱により変色が



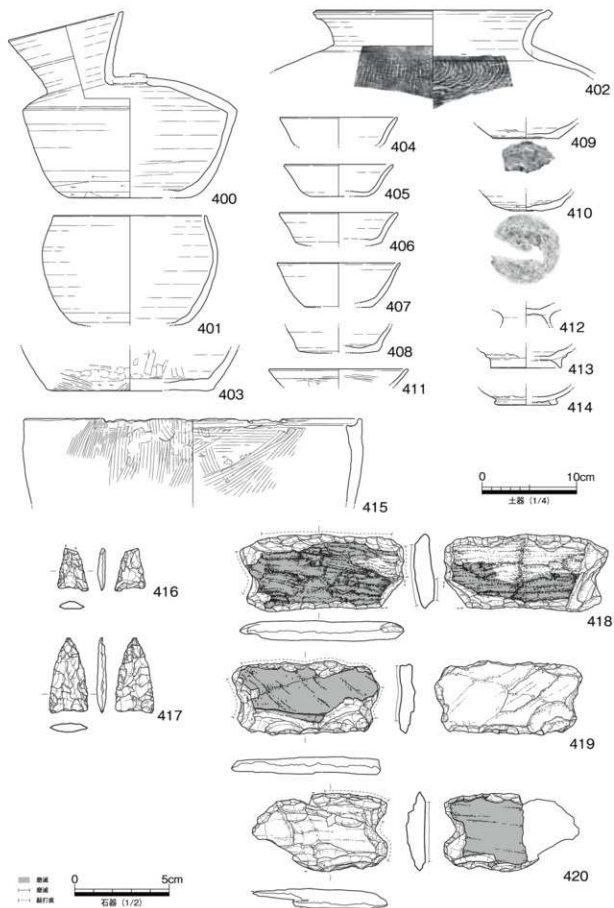
第92図 SD093出土遺物実測図5



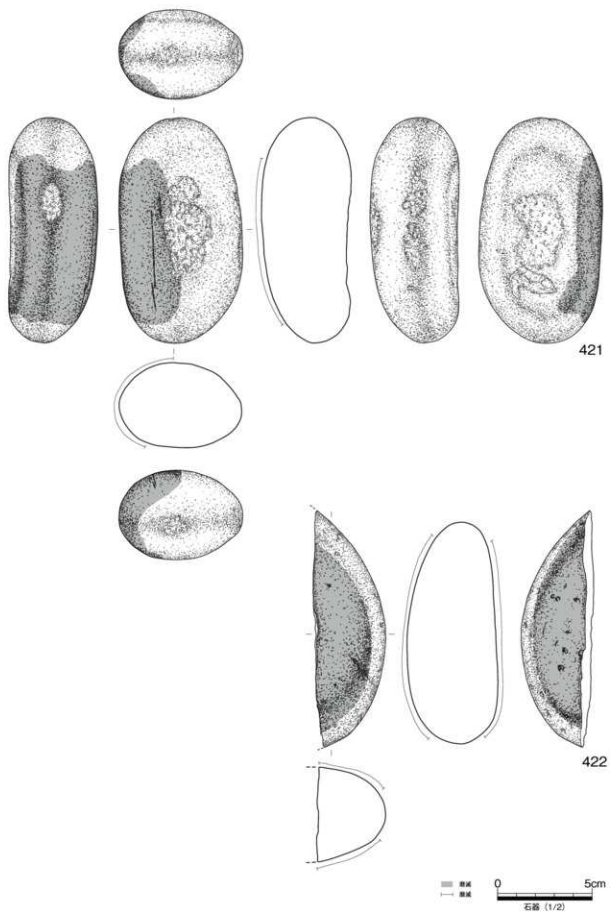
第 93 図 SD093 出土遺物実測図 6



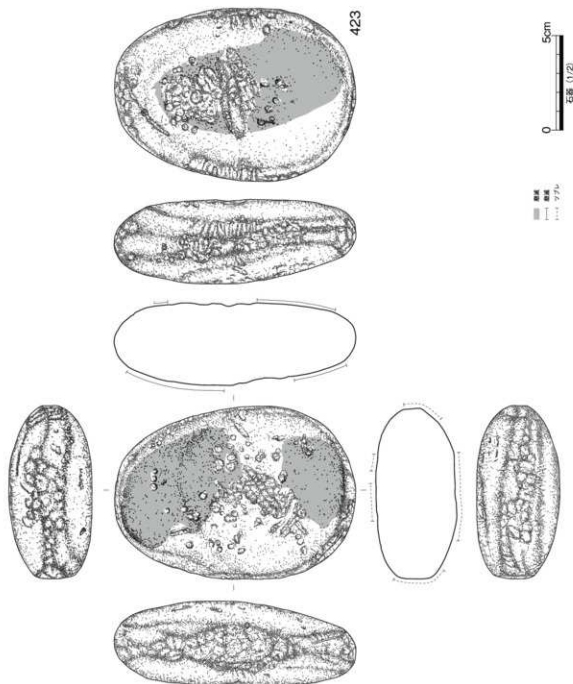
第94図 SD093 出土遺物実測図7



第95図 SD093出土遺物実測図8



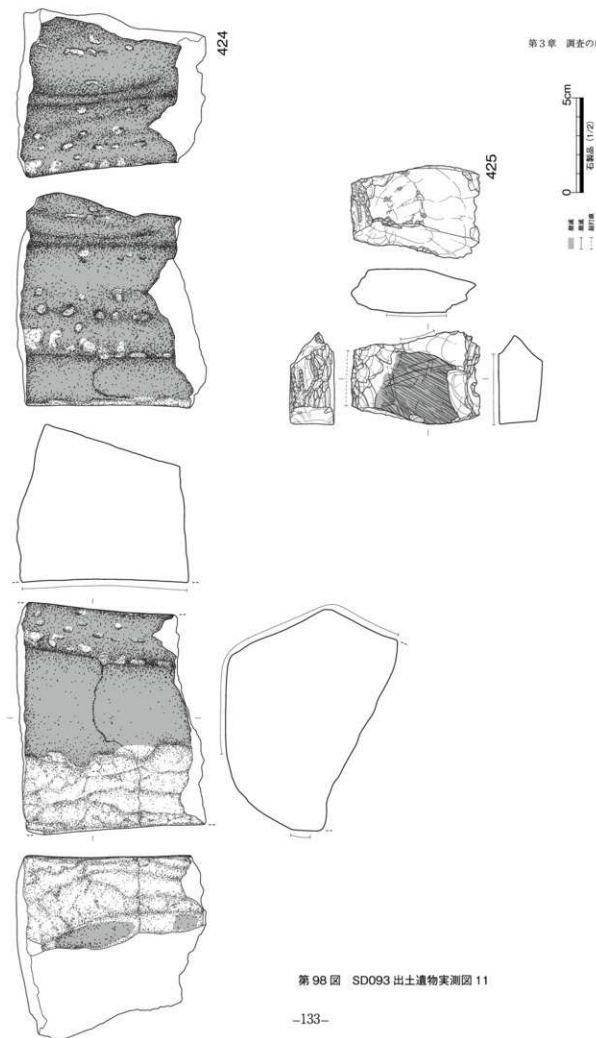
第 96 図 SD093 出土遺物実測図 9



第97図 SD093出土遺物実測図 10

見られる。340は下膨気味の粗製の球胴甕。体部内面に炭化物が付着する。342は体部中央に2対の角状の把手を付した甕Bである。口縁部は緩やかに外反して開き、端部は矩形を呈する。343は角状の把手の小片。344・345はカマド。344は掛部、345は焚口部の小片である。346は甌型土器。断面矩形の突帯を水平に貼付する。331～332・342が飛鳥Ⅱ～Ⅲ併行期、321～324・336～339が飛鳥Ⅲ～平城Ⅰ併行期、327は9世紀代をそれぞれ中心とした時期に位置付けられると考える。

350～403は須恵器である。350～353は杯H蓋、354～360は杯H。350・352・357～360は下層から出土した。361は杯G。362～366は杯蓋、367は皿の蓋。370～374は杯A、375～381・383～385は杯B。382は壺。387は皿。372の内外面には火漶痕が見られる。388～391は低脚高



第98図 SDO93出土遺物実測図11

杯の脚部片。392は長頸壺頸部。頸部内面にはシボリ目が見られる。393は甕の体部で、図化部分は完存する。394・395は直口壺の口縁部片。396・397は台付碗の口縁部片。400は平瓶。肩部にボタン状の浮文を貼付する。401は鉢。口縁部は小さく屈曲して直立する。402・403は甕。403は底部片で、体部外面に平行タタキを施す。以上の資料は、350～361、387～393・396・397が飛鳥Ⅱ～Ⅲ併行期、363・376・377・400が飛鳥Ⅲ～Ⅳ併行期、362・365・366・378～381が平城Ⅰ～Ⅲ併行期、372・374・384・385が9世紀代を中心とした時期にそれぞれ位置付けられると考える。

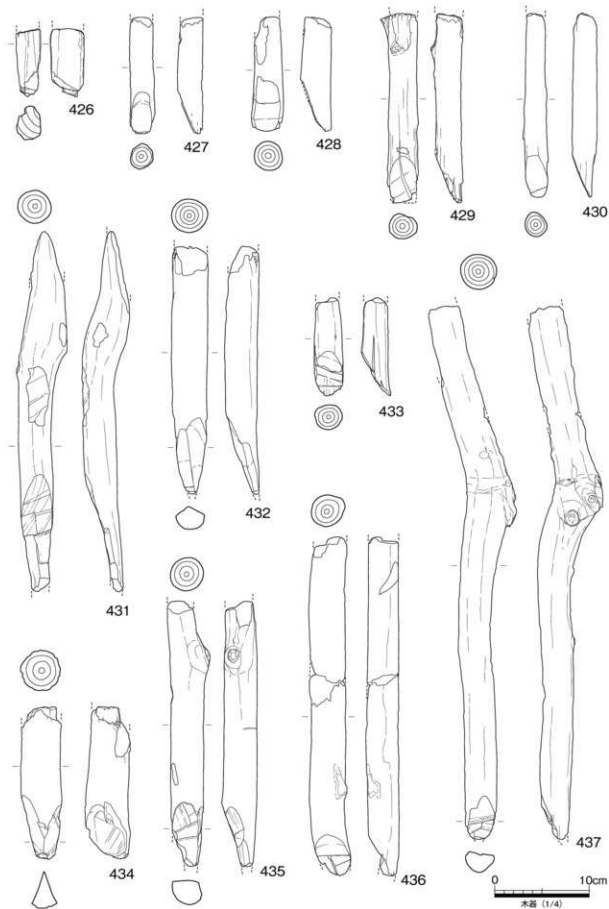
上述した出土資料より、本溝は7世紀中葉を中心とした時期に開削され、以後複数回の改修を経て、中層出土である373や402より、9世紀代までは溝としての機能が維持されていた可能性を想定する。

404～410は土師質土器杯。404は外面下半は灰色を、上半から内面は黄橙色を呈することから、2種の素地粘土を使い分けて成形した可能性が考えられる。404は下層、406は中層、その他は上層出土資料である。9世紀末～10世紀中葉を中心とした時期に位置付けられ、中・下層出土資料を含むものの、本溝の機能停止後の最終埋没時期を示す資料と考える。411は和泉型瓦器碗の口縁部片。内外面にミガキ調整を施す。412は土師質土器台付杯の脚台部の小片。413・414は土師質土器碗の底部片。全体にマメツが顕著で調整等是不詳。415は土製品移動式カマド。以上の資料はいずれも上層出土であり、11世紀代以降に位置付けられる。出土点数も限られることから、上述した須恵器甕403を含め、本来は第1面の重複する遺構に帰属する遺物の可能性が考えられる。

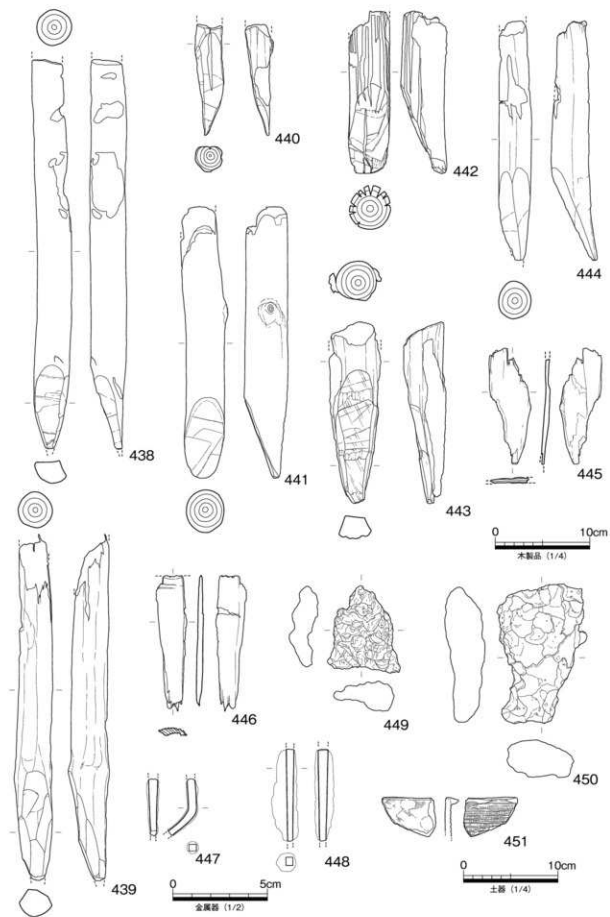
416～425は石器、石製品である。416・417はいずれも、サヌカイト製の平基式石鎌である。418～420は、結晶片岩製の打製石応丁である。420は紅籐片岩を使用する。いずれも側縁に抉りを備え、表裏面にマメツ痕が見られる。徳島県吉野川下流域からの搬入品である。421・422は安山岩、423は砂岩のそれぞれ円礫を使用した磨石で、網掛け部を中心に顕著なマメツ痕が見られる。また、421と423は、表裏面や周縁にアバタ状の敲打痕が認められ、叩き石としても使用している。424は砂岩製の砥石である。現状で網掛けした部分に使用を認める。上下端部を中心に大きく破損し、破損後に被熱した可能性が高い。425はサヌカイト製の砥石である。現状で1面にのみ使用痕を認める。おそらく使用中に破損したため、図上面や右側縁を叩き石に転用している。

426～446は木製品である。426～430は3区、431～438は7区、439～443は8区、444は12区出土の木杭である。3区出土の木杭は、径2.6～3.6cmとやや細く、その他の木杭は径2.9～5.5cm前後と、3区出土のものよりは太い芯持ち丸木が用いられている。いずれも下端を、1ないし2方向から削り尖らせる。材は、ツツジやシキミ、クスギ等の広葉樹が用いられる。本溝出土の自然木についても樹種同定を実施(第4章3節参照)したが、木杭と同様な樹種組成を示し、おそらくは本溝周辺に自生していた樹木を利用したものと考えられる。445は厚さ0.6cmのモミ属の板目材、446は厚さ0.8cmのツガ属の追根目材を用いた用途不明の板材片である。破損や表面の腐食等のため、調整等是不明である。いずれも上述した木杭とは異なり針葉樹が用いられ、製品として搬入された可能性がある。

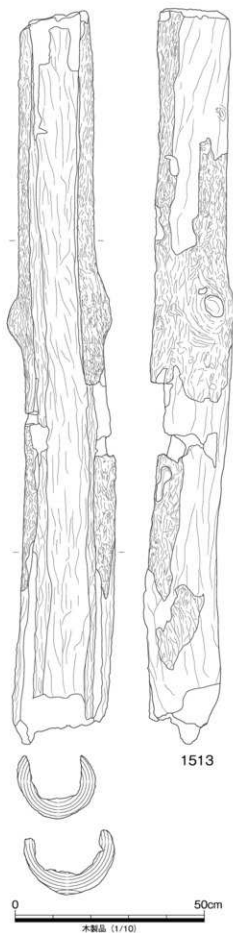
なお、上述した木杭のうち14点について、放射性炭素年代測定を実施(第4章第7節参照)した。年代値はやや幅がみられるものの、概ね7世紀中葉～後葉を最大公約数として、その前後に分布するようである。この年代値は、上述した土器資料から推定した本溝開削時期に近接し、概ね開削時にこれら木杭が打設されたものと判断した。溝は、ベース砂層を開削しており、掘削面での養生や漏水対策が大きな課題となったことが想像される。調査により出土した木杭は限られるものの、本来はより多数の木杭が打設されるなどして、護岸施設が構築されていた可能性が想像される。



第99図 SD093出土遺物実測図 12



第100図 SD093出土遺物実測図13



第101図 SD093 出土遺物実測図 14

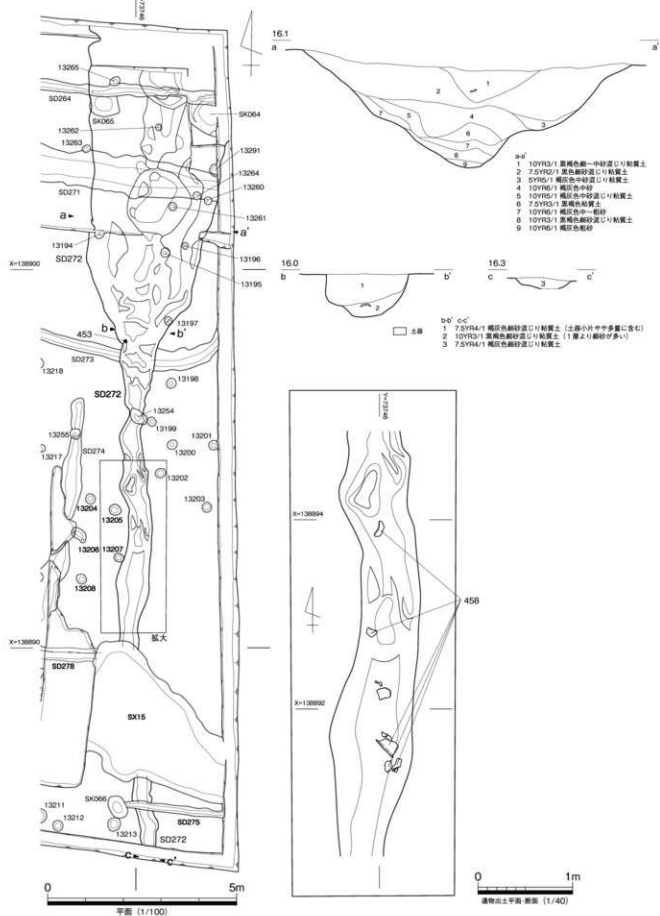
1513は6区西端付近中層から出土した木桶である。現存長194cm、同幅27.6cmを測り、底面及び側面は樹皮を多く留め、剥り貫き部の断面は箱形を呈する。樹種はタブノキ属（直管による観察）と推定される。

SD171は、4区南東部で検出した南北溝で、緩やかに西に弧を描いて配される。南端は調査区外へ延長し、北端はSD093に合流する。長さ約10.7mを調査した。検出面幅1.1～1.6m、残存深0.3～0.35m、断面形は皿状を呈する。北端のSD093との合流部で、幅・深さとも増加する。埋土は7層に細分され、褐色ないし黄色系の砂層で埋没している。また、1～5層は6・7層上面より掘り込まれており、改修の可能性が考えられる。溝底面の標高は、南端付近で12.2m前後、北端の合流部付近で11.8m前後は測り、高低差より北へ流下していた可能性が想定される。溝は、2・3区南側の舌状に付き出した丘陵西側の浅い谷部に位置することから、おそらくは溝上流部で溜め井等を開削し、SD093の補助水源としていた可能性が考えられる。

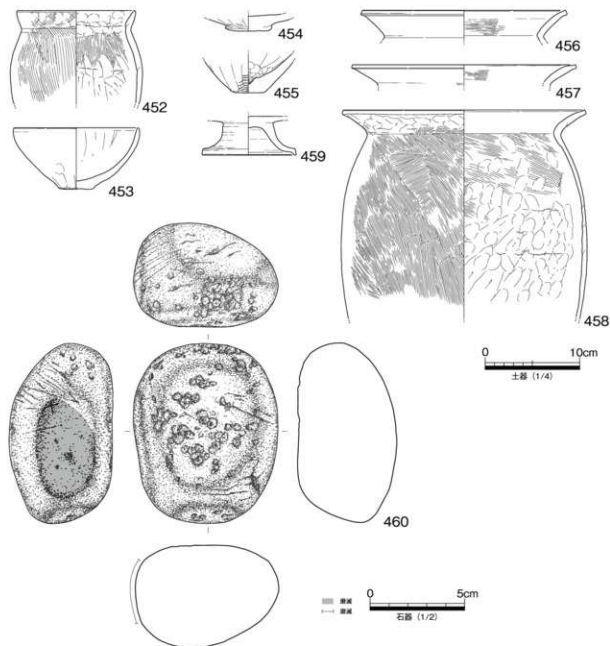
遺物は、図示した以外に器種不詳の土器小片9点と須恵器小片1点が出土した。451は、弥生土器逆L字状口縁部の口縁部片である。胴部に、半裁竹管状工具により7条以上の沈線を施す。弥生時代前期後葉に位置付けられる混入資料で、出土遺物より本溝の時期を特定することは困難である。本溝がSD093の補助水源として開削されたことを踏まえるなら、SD093開削以後の8～9世紀代に開削、機能した可能性を想定する。

SD272（第102～104図）

13区東端部で検出した南北溝で、緩やかに西に弧を描いて配される。SD273より後出し、SP13291等の柱穴のほか、SK064やSK065、SD264、SD271、SD275、SX15より先行する。南北両端は調査区外へ延長し、21.9mを調査した。調査時には、南側の溝と北側の落ち込みを別遺構として認識していたが、両遺構の埋土は近似し、出土遺物にも大きな時期差を認めることができず、連続する一連の遺構として理解することで、後述するように溝の機能がより鮮明となることから、両遺構をSD272として以下報告する。検出面幅0.40～3.45m以上、残存深0.12～1.50m、断面形は皿状ないし逆台形状を呈する。埋土は1～9層に細分され、上位に褐色系粘質



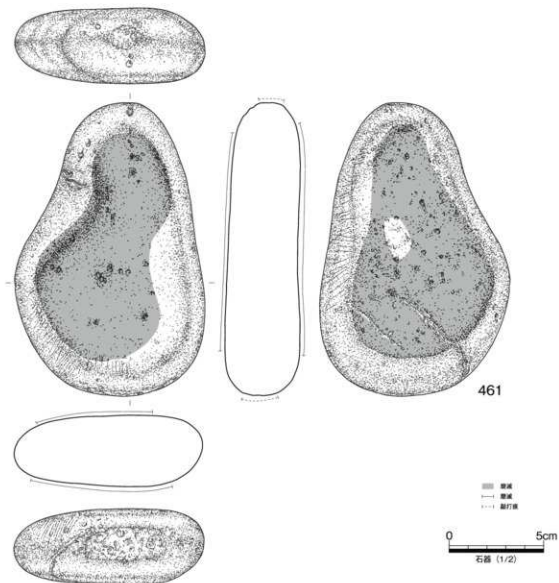
第102図 SD272平・断面図



第103図 SD272出土遺物実測図1

土（1～3層）が、下位に褐色系中～粗砂ないし粘質土（4～9層）がレンズ状に堆積していた。下位層は、主に溝北半部の深く開削された範囲に堆積しており、溝機能時の堆積層と考えられる。溝底面の標高は、南端付近で16.1 m前後、北端付近で14.0 m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が想定される。本溝北部にはSD093が東西に配され、合流部は調査区外となることから断定は困難ながら、後述する出土遺物からも、SD093との間に時期差は認められず、上述したSD171同様、上流に溜め井を配したSD093の支水路として開削されたと考えられる。SD093との合流部付近で、溝幅が広がり深度が深くなる点も、SD171と共通する。

図示した遺物のうち、452と459は北半部中層、460は同最下層より出土し、それ以外は南半部より出土した。452～455は弥生土器で混入資料である。456～458は土師器長胴甕。口縁部はSD093出



第 104 図 SD272 出土遺物実測図 2

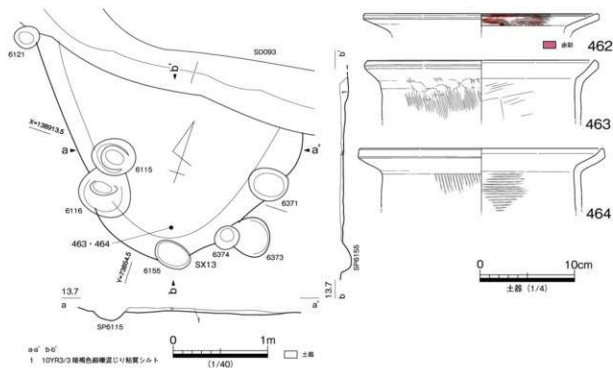
土 336 ~ 338 等と比して、より直線状に開き端部の拡張も小さくなっていることから、やや後出するとみられる。459 は須恵器台付皿の脚部片で、平城 I 併行期を中心とした時期に位置付ける。460 は、花崗岩の亜円礫を使用した叩き石である。図中央の広端面及び上面を中心に、アバタ状の敲打痕を認める。また、図左側面にはマメツ痕が見られ、磨石としても使用されている。461 は、磨石。

本溝は出土遺物より、7 世紀末 ~ 8 世紀代に開削・機能した可能性を想定する。

性格不明遺構

SX13 (第 105 図)

6 区第 2 面中央部で検出した浅い落ち込みである。北半部は SD093 に攪乱を被り、南半部のみ調査した。また上面より複数の柱穴が掘り込まれている。検出範囲で、東西 3.01 m 以上、南北 1.76 m 以上、平面形は三角形を呈する。残存深は 0.06 m 前後と浅く、断面形は皿状を呈する。埋土は暗褐色粘質シルトの単層であった。



第105図 SX13平・断面・出土遺物実測図

遺物は図示した以外に、器種不詳の弥生土器や須恵器、土師器の小片が30点程度出土した。462は、弥生土器広口壺の口縁部の小片。内面にベンガラによる赤色塗彩を認める。混入資料とみられる。463・464は土師器甕。いずれも口縁端部は小さく上方へつまみ上げ、464では端面下端に沈線1条を施す。外面は被熱により変色する。

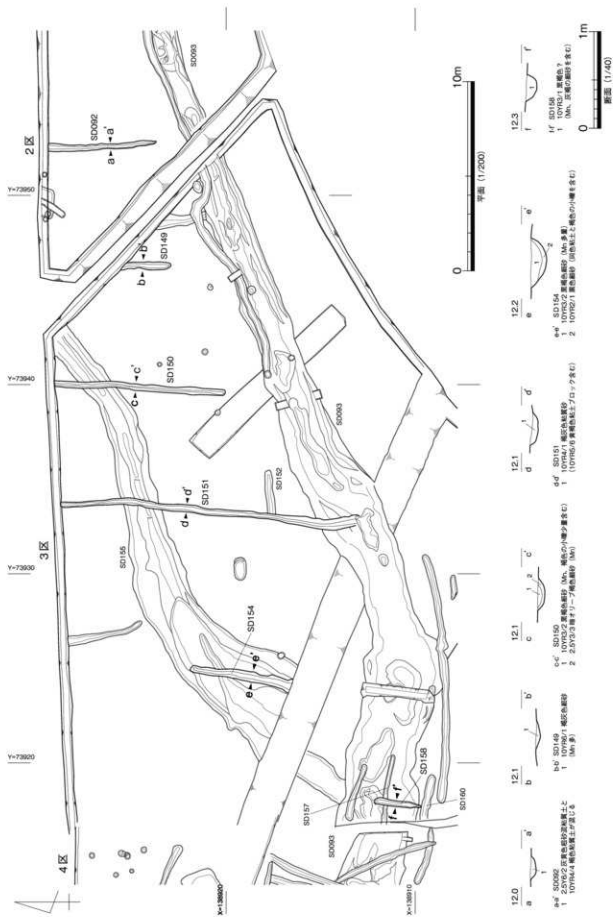
出土遺物より本遺構は、9世紀代を中心とした時期に位置付けられると考える。

耕作痕

SD092・149・150・151・154・158 (第106図)

2区西端から3区第2面で検出した、計6条の南北小溝群である。重複関係より、SD093やSD155より後出する。各溝の流路方向は、概ねN 3.21° E前後で、ほぼ正方位に配される。SD154を除いた各溝の検出面幅0.32～0.35m前後、残存深0.05～0.09m前後で一定し、SD154のみ検出面幅0.52m前後、残存深0.16m前後と、他の溝と比してやや規模が大きい。各溝の底面の標高は、11.8～11.9m前後でほぼ一定する。なお、延長約15.7mを検出したSD151の底面の標高は、南端付近で11.95m前後、北端付近で11.78m前後をそれぞれ測り、北へ傾斜して開削されており、それはSD092やSD150、SD154でも確認される。埋土は1～2層に細分され、褐色系の細砂ないし粘質砂がレンズ状に堆積していた。各溝の芯々間距離は、SD092とSD149が約6.37m、SD149とSD150が約6.44m、SD150とSD151が約6.26m、SD151とSD154が約8.50m、SD154とSD158が約5.47mをそれぞれ測り、SD154がやや西に偏して配されているため、その東西で芯々間距離に広狭が生じている。芯々間距離等に若干の相違が認められるものの、流路方向や埋土は各溝で近似しており、6条の溝が相互に関係性を有して開削されていた可能性は高いと考える。

遺物は、SD150とSD151、SD154、SD158の各溝より、器種不詳の土器小片が各々1～4点出土した。



第106図 SD092・149・150・151・154・158平・断面図

出土遺物より詳細な時期を特定することは困難だが、第2面で検出され、SD093やSD155より後出土することから、11世紀代の可能性を想定する。

本遺構のように、細溝を一定の間隔を保って同一方向に配した例として、香川県内では三木町尾端遺跡SD16～18・21（真鍋2003）や坂出市川津中塚遺跡鋤溝跡（西岡・山下1994）、同川津川西遺跡耕作痕（蔵本1999）等がある。また、溝ではないが、直線状に連続する小穴群が複数列平行に配された、坂出市川津一ノ又遺跡1②・2①調査区ピット群（山下1997）もある。尾端遺跡では「水田もしくは畑地」、川津一ノ又遺跡では「畑作に伴う作物の抜き取り痕」、川津川西遺跡では「耕作地の区画溝」の可能性がそれぞれ想定され、時期は、川津中塚遺跡例が「鎌倉時代」、川津一ノ又遺跡例が「中世」、川津川西遺跡例が「13世紀代を下限」とされる。また、尾端遺跡は更新世段丘下位面に、その他の遺跡が沖積平野にそれぞれ立地し、複数の溝（小穴群）が平行に配されたのみの川津中塚遺跡や川津一ノ又遺跡例と、縦横に溝が配され短冊状の長方形区画が連続する尾端遺跡や川津川西遺跡例等、立地や形状は細部で相違する。調査例が乏しく類型化等は先の課題としたいが、これらが各報告書で指摘されているように耕作に伴う遺構である可能性は高い。しかし、いずれの遺跡でも耕作土は削奪され、溝（小穴）の性格を特定するには至らない。本遺構も、畝作等の耕作に関わる遺構として報告するにとどめる。既述したSD093埋没後は、本調査区周辺は耕作地として利用されたようだ。